

イエス―期待に応えるお方

(ヨハネ六・一―一五)

あれはもう三年も前のこと。献堂当初から使っていたベンチによる様々な制約を取り払うためスタツキングチエアを探したのだが、いかんせんよい物はみな高くて手が届かない。そんな八方塞がりの状況でネット検索を続けていたら、一脚千円以下、しかも古いながらも有名ブランド品のスタツキングチエアが六百脚も出てきた。しかも台車付き。すごい条件である。だがその情報は二〇一二年一月現在、つまり半年前のもの。一瞬「ダメだ」と躊躇したが、すぐに「なぜ自分で決めるんだ。電話一本で済むことなのだから」と思い立って電話してみると、そうこうして今皆さんが座っている椅子は供えられた。期待を持って踏み出してみることは大切である。

閑話休題。ヨハネ六章はいわゆる五千人の給食の記事であるが、そこにはイエスに対して対照的な近づき方をした人々の姿が描かれている。以下それを見ていきたい。

一・期待した群衆

五章の舞台がエルサレムであった

のに対し、この記事が行われたのはそこから百キロ以上離れたテベリヤ湖(ガリラヤ湖)の北東岸のことであった。もちろんこれらすべての人がエルサレムからの「追っかけ」ということではないだろうが、中にはずっとイエスを追いかけていた人もいたように思う。何故か。簡単である。それは彼らがイエスが方々で行った病氣直しの「しるし(原文は複数形)」を見たからである。彼らはイエスの奇跡を見、イエスに期待したのだ。百聞は一見にしかず、である。ある人はこうした「追っかけ」的状况をもって、「それは真の信仰などではない。単に物見高だけである」などと評するかもしれないがそれは言い過ぎというもの。もちろん彼らがイエスの行う「しるし」の背後にあった真の意味について正しく考察できていたということはない。だが兎にも角にも彼らはイエスに期待した。それだけは紛うことなき事実なのだ。

二・期待できなかった弟子達

そのように四方から集まってきた群衆を見たイエスは弟子のピリポに「どこからパンを買ってきて彼らに食べさせようか」と尋ねる。これはある種の信仰のテストであったが、ピリポの答えは全く持って残念なものだった。二百デナリ。労働者二百日分の賃金だから、今様に言えば一日七〇〇〇円と考えて一四〇万

円だ。大した額ではあるが、弟子たちはイエスのした数々のしるしの目撃者なのだから、もう少しポジティブでもよさそうなものだが結局「足りない」で終わってしまった。ではもう一人の弟子、アンデレはどうか。成程彼は粗末な弁当を持ってきた少年をイエスのもとに連れてはきた。だがその発した言葉は「それが何になりましょう」である。ピリポはイエスに直接声をかけられた男だし、アンデレはペテロを主のもとに連れてきた弟子であった。しかしイエスのもとに続々とやってくる群衆たちを目の前にしたとき、彼らの期待は厳しい現実の前に粉碎されてしまったのだ。

三・期待に応えたイエス

この奇跡は四福音書全部に記述がある奇跡物語であるが、ヨハネの記述はいわゆる共観福音書のそれとは異なっている。共観福音書ではイエスは弟子たちに「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」と語り、実際にパンを裂いた後、それを弟子たちに渡して配らせている。対してヨハネ福音書ではあたかもイエス自身が直接パンと魚を分けているように記述している。更にイエスは「彼らに欲しいだけ」分けられたとも書かれている。実際には一人で五〇〇〇人、いや女性や子供も含めれば一〇〇〇〇人を優に超える人々に食物を渡

すのは無理だから、実際には共観福音書で描かれるようになされたのだろう。しかしヨハネはテレビにおけるクローズアップのような手法を用いて、私たちの目をイエスに集中させている。そう、イエスこそは私たち人間のすべての必要を満たす、唯一無二のお方なのだ。

* * *

青雲の志を抱いて故郷を離れ、同志社に進んだ彼。しかし成績は振るわず七人中の六番でようやく卒業。だが夢と希望だけはご立派だった。新聞のインタビュアーに向かって「私は中国の人々のため三十代には小学校、四十で中学、五十で高校、六十代には大学を建てるつもりだ」と滔々とビジョンを語った。あきれ果てた人々は彼の名の一字を取り「ホラ安」とあだ名した。その後中国では一定の成果を上げ学校経営にも成功したのだが、敗戦によりすべてを失い無一文で帰国した。それでも彼は諦めなかった。「神よ、日本を再建するため私どもをお用い下さい」そう祈って、東京都下、町田にあつた工員寮を買い取り学校を開いた。そして今。彼の主に対する期待と祈りは町田の地に大輪の花を咲かせている。清水安三先生。我が母校、桜美林学園の創立者である。友よ、神を信じよう。イエスに期待し付いていこう。すべての必要は主の手が満たして下さる。アーメン。